

ねこみ

猫 義 通 信

平成五年
(1993)
四月十五日発行
(年四回発行)

発行人 東 明雅
発行所 柏市つくしが丘2-2-12 東 明雅 方
Tel. 0471-75-1192

第三の留め

東 明雅

俳諧の第三は、大体で、にて、らん、もなしなどの語で留めることに決まっている。そのことはちょっとでも俳諧を習った人なら、皆承知していることだろう。

第三の留字がこのように定まったのは、連歌の宗祇の頃からと言われているが、その前から、これらの形の留めが圧倒的であり、それがそのまま俳諧に伝わって、厳重に守られて来た。そして、その為に自然とこの形に一種の風格が生じ、第三を外の字で留めれば、何か安っぽく、平句めいて聞こえるまでに至っている。たとえば、

二番草取りも果さず穂に出る
股引の朝からぬる川こゆる

などと書いても、意味は全く同じながら、二番草取りも果さず穂に出る
股引の朝からぬる川こえて

と比べてみれば、風格の差、いわゆる第三体としての形と意義とがはっきりするだろう。

ところで、何故にこの、にて、にて、らん、もなしが使われるようになったか、これを説明したのは「俳諧無言抄」である。「脇の句、文字にてとむるゆへ、懐紙に文字のたけならばざるやうにてとまり、はね字のかるきかなにてとめたる物也。此ゆへに若脇の句に、にてをはにてとまらば、第三は文字にて留る也。但かやうの事は名人にゆづりて常の人は常の留りの外はせぬ物」ところうる、是又此道の習也」とある。

右を意識してみると、「脇の句は大体において文字留め(韻字留め)であるから、その続きに第三も文字留めにすれば、文字留めが並んで懐紙面が見苦しくなるから、にて、にて、らん、もなしなどの軽い仮名で留めよ」と言うのである。そう言えば

七部集の作品で、第三をにて、にて、らん、もなし以外で留めたのは、すべて脇がてには留めの場合で、例外は僅か二つにすぎない(ひさご・猿蓑)。しかもこの二つの例はともに浜田珍碩の作品であるのが注目される。珍碩はこのように特殊な句法を好む癖があったのか、外の人にはみな師の教えを守って格外なことは誰もやっていない。

さらに、脇句が文字留めになっていない場合の第三には、「五つ文字」という方法まで考えられていることは、季刊連句二十六号で紹介されている通りである。

要するに、第三の留めが、にて、にて、らん、もなしで留めることになっているのは、大切な第三を大高く、風格あるものとする為である。その理由も知らないままに、それ以外の勝手な留め方をすれば、必ず連句の芸術性の否定もしくは破壊につながるであろうし、このようなことを認めてゆけば、やがては発句に切字を入れなくてもよい、花は桃でも梅でも梅でも何でもよいということになってゆくであろう。我々は、先人の教えに対して、もすこし謙虚であり、道理のあるものはあくまで守って行くべきであろう。

三つ物的小話

中川 哲

麻布十番の笠着俳諧で知り合ったポランドのベアータ嬢を誘って、遊さんとも一緒に歌舞伎座の「狐忠信」大向う見物を体験してもらった。終わったあとで感想を聞いたら、「長いあいだポランドの両親にあっけないので、親を慕う仔狐の気持ちがよく判って涙ぐみました」とのことだ

ある。鎌之助ご自慢の宙乗りや早替わりにばかり拍手喝采を送る日本のお客さんよりも、この芝居の真髄を掴んでくれたと、私はすっかり嬉しくなりました。丁度クリスマスイブの夜だったため、彼女は劇場を出るとすぐその足で、渋谷の教会のミサへ駆けつけていった。

晩飯が済むと銭湯に行かないと、一日が終わったような気がしない。香港から留宇でうちの近くに住む青年にも湯豆腐かなにかで燗酒を飲ませたあと、無理に誘う。一年前来た頃の頃は、大勢のなかで裸になるのを嫌がったし、まして江戸っ子好みの熱い湯には身震いしていた。いまでも麻布古川には落語の小言幸兵衛の末裔みたいなお爺さんがいて「なんぞえ、こんな日向水にはいれねえのか」と威勢づけられたりする。ヒナタミズという日本語は通じなかつたろう。キョトンとしていた。その彼氏もいつの間にか銭湯ファンになって「熱い湯に入ったあととはさっぱりして気持ち良い」と威張っている。

桜が咲くとなにかおちつかない。私は一人で青山霊園を歩きまわった。昨は去年朝鮮旅行をした連中と一緒に谷中墓地の夜桜見物と洒落たらしい。蕁蕁を小脇に一升瓶と玉子焼きをぶらさげて出ていった。酔っぱらっているうちに、靴をかつぱらわられたらしく、裸足で日暮里の商店街まで歩いて帰ってきたとのことである。翌日行ってみたらオンポ口靴が誰かのお墓に供えてあるかもしれないと笑話になった。それにしても、桜の花は墓地によく似合う。

ここまで書いて伴に見せたら、「根が切れてないなあ」と生意気なことを言った。

アケコレ連句

式田 えい

・曙連句会は平成四年四月に発足。丁度一年たちました。
連句しましょうよ、ならば先生は母上を、というわけです。

この会の特徴は、ファッション関係のバリシティーや雑誌の仕事をしている人がほとんどです。勤めが九時―五時というわけにいきませんから、開始時間が遅いこと、でも、めげずにがんばっています。職業柄、こんな句が出ます。罰きはいつも母（姑）式田和子です。

青竹に花枝六尺を投げ込んで

恵美子

これは、ファッションショーの会場の飾り付けの花の句に、生花作家の名前の入った俳句です。

二十韻 走り節

屋形船幽霊と飲む冷し酒

航

つつかれ気づく夏月の笑み
ひらひらのネッカチーフの陰べー

明子

恋をばぐくみ愛を育てた

明子

この航さんは高名な俳人のご親戚で、俳句上手。こういう方が入ると一巻が締まるそうです。連衆の年輪の若いのも特徴です。

二十韻 夏深し

遠矢はしと五輪開幕夏深し
額に汗シタクト振るひと

和子

えい

甘辛く煮物焼物折詰に

航

出て行く汽車に深く礼する

薫

満月に入信誓ふ若夫婦

ひやひやと待つくちづけの香

明子

なんと、あの合同結婚式をふまえてこの月の句を出した明子さんは、すぐおめでたとなりました。もうじきベビーが誕生します。こんな座はないでしょう！ 若いところでもうひとつ。

二十韻 夏腹せの男

動め掃りにのぞく顔見世

えい

動い年出世したなあ勲九郎

薫

青学からもうでよ妃殿下

和子

お妃様はお決まりになりましたけれど、もっと若いピカピカの新人かほるさんは青学出身で、平井照敏先生のゼミで俳句を学んでいらっしやったとか。

二十韻 春雷

とっくり着せし孫泣きにけり
ものもらひ鏡にうつる顔は誰

かほる

ヤングにも窓際族が出て来たという
俊二逝く「べえすけ」花の係長

由美

（発句に桜が出たため珍しい根無し、無常の花が出ました）

首尾した一巻をとも思いましたが、ちょっとずつ連衆の方々のプロフィールを紹介してみました。都営地下鉄曙橋近くに席がありますので、暑会、会員九名ほどですが、海外出張も多く皆さんお忙がしいので月一回の集会も精勤というわけにはいきませんが、いづれ、曙会のコレクション、アケコレ連句が評判になる日を夢みております。

連句との出逢い

佐藤 良弥

人は人生の節目節目で出会う人の影響を色濃く受ける。その影響は、その人のエネルギー準位を俄かに高め、かけがえのない精神的な資産を形成することを助けてくれる。私は五十二歳にしてようやく明雅先生に出会った。この上ない喜びであるが、何故もっと早くお目に掛かることが出来なかったのかと残念でならない。

毎週土曜日には決まったサウナに出かけ、汗を流しながら半日はきっちり無為のうちを過ごす。日曜日は気が向けば打ち放し練習場で棒振り。帰りはお好みの五目焼ソバを妻と二人で。明雅先生即連句は、私の休日の過ごし方を大きく変えてしまった。

連句の世界にはパソナリティー豊かな魅力ある人が次々と登場する。これらの人達が句座にあつては、同等の連衆として扱われるという希な原則を連句は生命として持っている。私には連句の風交とヨーロッパの社交界が二重映しになって見えている。社交界の華と同様、連句の世界にも女性だけとはいわず連句の花が咲いている。それは上手だけに止まらず人格の円熟を併せている魅力のように思われてくる。

新聞記者は、生涯、人に頭を下げることを知らない異持ちならぬ人種だ。社会人として偏屈で、評論家にもならない限り、使い道がない。科学技術記者だった私も例外ではない。自分の持つ驕りに辟易していたころ、亀戸天神の藤を覗に行ったのが縁で連句との出逢いが完成した。やがて一年、今見ている花にも増して藤の花を見ることのできる日が楽しみだ。正式俳諧奉納に、今年も参加できることに、私は人には分かってもらえない意味を込めている。

連句入門

梅 紀子

昨年十月からのACC講座新入生です。半年ほど前に、ふと独り言をいったり、人と話していて言葉が出なかつたりということがあり、何とかせねばと思ったのがきっかけです。好きな日本語のリズムに浸れば幸せと思えました。

教室で周りは俳人ばかり多士済々と気付いた時は青くなりましたが、ままと度胸をきめて歳時記なるものを開いたのでした。が、目を重ねるにつれ、連句とはこんなに面白く深いものかと目からウロコの毎日です。書面骨董の本当の世界といったら可笑しいでしょうか、一見古ぼけていて奥底の知れないファンタスティックワールド。奇麗なサバイバルゲームであっても、道化の戯れ、王者の豪奢が自在になるという先輩方の境地に早く達したいものです。

年来修業してきた能面打は、写しを基本とする戦しいもので、ややもすると個性とか独自性とか言いたがる自分の貧しさを感じてきました。

共同作業という雑駁ですが、連衆の一人一人に響きあつて思わぬ妙音を得るといふところが一番の魅力です。座の運びに厳然たる作法があるらしいことも段々わかってきました。

蕉風連句の真髓とまではゆかなくとも、新米でもワクワクドキドキできるこの楽しさを出来る限り味わってゆきたいと思ひます。

自然や暮しに今までと違う新しい眼を向けられれば、それは自分の打つ面にもなにがしかの「転じ」をもたらしてくれることでしょう。

下坂 元子

・連句の世界に足を踏み入れてから、私にとって一つ大きく変わったことがある。桜が好きになったことだ。幼い頃はサクラが大好きだった。：ような気がする。家の裏庭にも太い樹があつて、風でどつと散りかかる花吹雪に大喜びした記憶がある。

戦争が激しくなり、ひよわな子供だった私には、「健全なる精神は健全なる身体に宿る」の標語は残酷であり、時流に結びついた桜がいつしか嫌いになっていった。それがあらぬか若い頃は桜と関くと反射的に心がそっぽを向き、震んだ空を背景にはつきりしない薄桃色のマッス「花の雲」「花見」といえば真産の上の手拍子といった具合に、むしろマイナスのイメージが大きかったものだ。

何時だったか忘れたが、内田百閒の「サラサートの盤」を原に、鈴木清順監督が製作した「ツイゴイネルワイゼン」という映画の中で、青空にくっきりと残雪を冠った日本アルプスを遠く置き、万葉の桜がいつせいに舞い散るシーンを見て思わず心が震えた。その頃から桜が又私の中でふくらみ始めたのだ。そして連句入門。初めて知った花の座の大きさ、花を賞づる心の深さ、一年目の終りに、教室で初めて擲きの勉強をさせて頂くことになり、有難いことに偶然にも明雅先生が初擲きのお助け役で一席して下さった。臨起り二十韻、

山路来て何やらゆかしすみれ草 翁
を立句に巻いた一巻の、それこそ生まれて初めての花の座に、あの「ツイゴイネルワイゼン」の花の映像が心の片隅にあったのか、
花の里遠き嶺々雪残り 元子

と付けて、今なら「季重り」の一声でけしとんでしまふような句を、先生が「うんよし」
とつなぐて下さってパスした時の嬉しさ。頭の中真白、頬っぺ真赤、眼はうる／＼の初擲きの一日だったのを今でもしっかりと覚えてる。

それから今に続く花行脚。去年は時分を測って、市の観光課に電話し、即新幹線に乗った三春の滝桜と盛岡の石割桜、花は盛りにはのみかとはというものの、どちらも見事な盛りの方に会うことが出来て嬉しかった。

遠い名木を尋ねることが出来ない年でも一人で訪うひっそりとした禪寺の桜大樹は本堂に私一人のものだ。今川氏菩提の寺とか、本堂の前の紅枝垂は地を払って大々と私に大切な亡き人を偲ばせてくれる。

先年本堂がコンクリートに変わって心底がっかりしたが、万物は移り行くものと諦めた。花を尋ねるのは一人の時が多い。行ったからといって、良い花の句が生まれる訳でもないのだが、心ゆく迄ぼんやりと佇む今年はこの桜と語りあえるか、何時迄花行脚は続けられるのか、やがては、何処からかちら／＼と舞ってくるひとひらの花びらに満ち足りるような境涯になれるだろうか。

花咲けば芳野あたりを欠廻 曲水
まづ、とても無理なことであろう。

A・C・C 案内

秋元 正江

四月からのA・C・C連句実作講座には、新たに発句を加えることになった。

現代連句人は発句作りの勉強が不足のようである。俳句づくりの勉強をしるとは言わないが発句作りは学んで頂きたい。連句の世界で猫義会が指導的立場にあるためには、連句固有の方法を捨てぬことである。それと同じことが発句についても言える。俳句固有の方法を守ることだ。と季刊連句十九号に草間時彦氏は書いていられる。

洛陽に細腰多し花水 明雅
編の扉に垂るる織紐 正江

これは文音「花水」の巻の発句と脇である。明雅先生の中国旅行吟、細腰はサイヨウ。女のこしつきの細くしなやかなこと。美人の形容に用いる。やなぎごし。「楚王細腰を愛せしかば、宮中に飢えて死する女多かりき」の美女多き洛陽、日本ではもう珍しくなった花水にはどのような花が封じこめられていたのであろうか。

さらさらした水に夏の日射しが反射してその溶けそうな氷の中から凍らされた花がこちらを誘っているような幻想を覚える。発句とは俳諧の第一番目の句で立句という。この句には五・七・五の十七音の中に季語と切字を入れ、この十七音の中で完全に独立した一つの芸術世界を作りだす権利と義務が与えられているのである。

「云おほせて何かある」という芭蕉のことばも、自己完結しないで他者の応接する余地を残しておくという意味あいを含んでいる。

前句なしに鑑賞されるのが発句である。折りおりの自然の中の生命の輝きを発句にまとめてみようではありませんか。

◇ 猫義発展基金ご協力感謝いたします。

- 一口 小林千雪 倉本路子 真田光子
- 村田富美 水島ますみ 雅賀遊
- 速水一雄 木場田文夫 篠原達子
- 三〇 佐藤良弥
- 一万 原田千町
- 五〇 中島啓世 (敬称略)

◇ 発展基金は随時受け付けております。よろしくお願いいたします。

振替口座 東京31550348 猫義同人会

* 連句とさかな *

めばる

杉江 杉事

筆者の住む吉祥寺の繁華街から少し離れたビルの一階に魚屋さんの経営する小料理屋がある。店は魚屋のおかみさんと娘さんが切り盛りして結構繁盛している。今日は皆さんをここに案内することしよう。

一歩店内に入ると壁に入荷の魚の貼り紙がある。さて今日は何を肴にしよう。めばるの文字が飛び込んできた。めばるの煮付できまり。やがて冷酒と共に煮付が運ばれてきた。

ころころして骨離れも最高。うまい。春告魚と云われるだけに矢張り句の味である。

へ蛇足)色の黒赤は棲息地の浅場が黒。深場が赤といわれる。因みに関東では黒、関西では赤が好まれる。

S 猫義会員作品集 S

「連句 猫義作品集 III」が出来上がりました。どうぞお買い求めください。(¥1800)

〒二七七 柏市加賀2-12-11

梅田 利子 方

(0471-7218119)

〔Q〕 花火という季語について、季寄せでは晩夏、「連句入門」には秋の正花と出ています。打ち上げ花火と線香花火、火のついでないものの区別はどうかなど、今まで花火の句は避けてまいりましたが、お教えよろしく願います。

（ころも連句会 加藤治子）

〔A〕 花火は近世初期は、上方で旧曆七月（秋）のころ、盛んに打ち上げられたらしく、当時の歳時記には、踊り、送り火などの中に記載され、孟蘭盆の行事の一つのように考えられる。ところが近世も後期となり江戸が文化の中心となると、花火は納涼のための行事の一つとなり、例の両国の川開きなどに見られるように、五月の末

（仲夏）から六月（晩夏）の行事となってしまった。延享二年（一七四五）前後に出版されたと思われる「改式大成清純」という歳時記には、「花火は六月盛りにして、七月に入ってから十々に一つ也。然れども、発句には秋に用いる事、猶所請あり。前句夏ならば尤も夏に用うべし」とあるが、さらに下って、享和三年（一八一三）の「俳諧歳時記」には「花火、夏たるべきものを古人秋とすること、いまだ詳ならず」と言っている。この歳時記の著者瀧沢馬琴は有名な八犬伝の著者で、博学をもって知られた人であったが、この花火の受容の変遷が分からなくて、なぜ、夏の納涼の花火が季語では秋になっているのか迷ったのは滑稽である。

明治以後、俳句では夏の季語となり、晩夏とされていたが、連句では大正、昭和に至るまで秋の正花とされて来た。私の「連句入門」は昭和五十三年の出版であるが、やはり、その伝統を守っている。しかし、

これはどうしても現実には合わないもので、現在の猫養では、花火は夏（晩夏）の正花としており、「連句入門」の改訂版を出す時は、はっきり改めたいと思っている。

ところで、この花火は、正花として、打揚げ花火、遠花火、花火舟など、いろいろ応用できるであろうが、おたずねの線香花火・手花火・鼠花火などはいかがであろうか。これらの類も確かに美しいし、また、花火という名が付いている以上、夏の正花としての資格は否定することはできないであろう。但し、これら線香花火・手花火・鼠花火の類には、打揚げ花火・仕掛花火に見るような物類豪華なところが無いのも事実であろう。花にはもともと人に感動を与える賞美の意がなければならぬ。

1 手花火のこぼす火の色水の色

後藤夜半

2 手花火の紅紙金紙夜を待てり

大久保九山人

などは辛じて正花としての風格をもつものと言えるであろうが、これだけのものを出すことはなかなか困難であろう。

2はまだ、火のついていない手花火を詠んでいるが、このように火はついてなくても表現次第では立派な花の句となるであろう。

都心連句会の四十年代の会員は約十五名、月例会場の農林中金目黒寮への常連は八名前後だった。今振り返って当時の会員の色訳をしてみると、野村牛耳のような文人派、清水瓢左の宗匠派、池田豊城の俳人派の三つとなろうか。

捌きの勞に謝するため会から盆暮に酒二本を贈っていた牛耳が昭和四九年七月六日になくなられた後は、

「牛耳さん以外は皆おんなじよ」

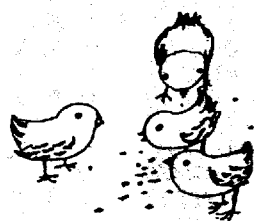
という豊城さんの意見でこのしきたりはなくなつた。

豊城さんは明治四三年一月、東京芝白金生れの江戸っ子。慶応義塾経済学部を卒業して三和銀行に入り、研修のため欧米へ派遣された経歴をもつのエリート銀行マン、と豊城、岡本春人、私の三人で浅酌した折、元は同業だったという春人さんから伺ったのは四四年の頃だ。

豊城さんは学生時代から虚子の指導を受けていたし、三一年十一月上梓の角川版「俳諧歳時記」に掲載されている御自慢の

ひき暮れぬかの火はしかと蘆火なりを初対面の人には名刺代りにしていたから、都心連句会では俳句の第一人者だった。昭和十年ホトトギス社から「俳諧」が発行されると、連句に関心を持ち、発足した「冬福連句会」に最初から参加して、虚子の女婿で好事家と云われた眞下喜太郎の働きによって実作に動んでいた。

その連句熱が昂じて豊城さんが昭和三四年五月に創刊した「現代連句」の編集後記には、「昭和三四年平和は益々続くであろう。俳諧は必ず盛んになる。本誌発刊の主旨も勿論そこにある」として書かれている。



手許にある「現代連句」五冊を繰りかえると、作品としては木堂蟹歩「河豚」、森無黄瀬「つくく法師」（連衆蟹歩、鶴沢四下、伊藤松宇）等の歌仙があり、牛耳一派——海音寺潮五郎、小山寛二、綿谷雪、岡部丹紅、知切馬骨、豊城関係の中山紅夢、金子七房子、川崎雅流、田村無径等が活躍している。

昭和三五年六月、瓢左、豊城、柚平三氏の呼びかけで発足した都心連句会には「現代連句」に登場している連句人が皆参加した。

豊城さんがなくなつたのは五五年頃だったろうか、今はすっかり忘れられて仕舞つた。

編集部より

○ 今年はずいずい中での花見でした。桜の花がもつのは良いですが、散り際を惜しむのも鑑賞の大事な要素なのだと実感することでした。

○ 俳席紹介は「ねこみの通信」創刊号以来の企画ですが、新しい会も増え、一巡はさらに先のようにです。明雅先生の教えを頂く仲間が多くなつてくるのは嬉しいことです。

○ 七月には富山県井波町で、「浪化上人の芭蕉入門三百年」を記念する全国連句大会が開かれます。浪化撰「有磯海」をそれまでに手に入れたと思うところですね。

季刊「ねこみの通信」第十一号

発行者 猫養連句会

印刷所 アトリエ・ネコ